県立高校あり方検討会議　農業部会
意見のまとめ

令和８年１０月２２日

1　目的

千葉県における県立高校の今後のあり方などについて学識経験者や教育関係者、産業関係者から意見を聴取するため、県立高校あり方検討会議を設置した。

2　委員の構成

氏　名	所　属　・　職　名	備　考
田畑　淳一	南九州大学教養教育センター　教授	学識経験者
領家　隆史	県立成田西陵高等学校　校長	教育関係者
桑田　美和	県立茂原樟陽高等学校　校長	教育関係者
山中　敬生	東金市立東金中学校　校長	教育関係者
越川　浩樹	一般社団法人千葉県農業会議　事務局長	産業関係者
嶌津　昌明	千葉県農業協同組合中央会　専務理事	産業関係者
篠塚　佳典	株式会社　芝山農園　代表取締役	産業関係者

3　検討会議のスケジュール

＜第１回＞

・日時　令和８年６月１日（月）　午後２時から４時

・場所　千葉県教育会館本館７０３会議室

・議事　（１）県立高校あり方検討会議の趣旨

（２）学校数の推移等について

（３）県立高校改革推進プランについて

（４）県立高校の現状について

（５）その他

＜第２回＞

・日時　令和８年７月１０日（金）　午前１０時から正午

・場所　千葉県庁中庁舎９階企画管理部会議室

・議事　（１）農業科・コース設置校の学びの分類、進路状況について

（２）農業科設置高校建物状況・備品状況について

（３）他県の農業関係高校の取組例について

（４）N-E.X.T.ハイスクール構想における改革先導拠点の取組について

（５）今後の農業関係高校のあり方について

（６）その他

＜第３回＞

・日時　令和８年７月２７日（月）　午後２時から４時

・場所　千葉県庁中庁舎９階企画管理部会議室

・議事　（１）県立高校の魅力向上に向けた中学生・保護者アンケートについて

（２）今後の農業関係高校のあり方について

（３）千葉県Ｎ-Ｅ.Ｘ.Ｔ.ハイスクール構想の普及について

（４）ここまでの意見のまとめ

（５）その他

４　検討会議での主な意見

（１）学校数の推移等について

・農業大学校でも、常任委員会で最初に取り上げられた課題はトイレだった。現在では全て洋式化され、清潔で使いやすい環境になっている。トイレは子供たちにとって切実な問題であり、小・中学校での環境や経験の影響も大きい。

・中学生は施設の古さを気にすることはあるが、最終的には「何を学べるか」という学校の教育内容を重視して進学先を選んでいる印象がある。

・国立大学への推薦制度があれば、農業高校を志望する生徒も増えるのではないか。

（２）県立高校改革推進プランについて

・農業高校の将来を考えると、志願者を確保するためには、施設の整備以上に教育内容や専門性を高めることが必要ではないか。千葉県でも、既存校を再編するより、新たに予算を確保して中核となる学校を整備する方が魅力的ではないか。

・農業高校を見ると、都市部にある学校は３校だけで、それ以外は県東部や南部に集中している。人口が少ない地域ではあるが、特色ある教育や取組を打ち出していかなければ、今後はさらに縮小していくのではないか。

・他県では、京都府の桂高校のように、農業系学科からでも半数程度が国立大学へ進学している学校がある。農業高校からでも、そのように大学進学を目指しやすい仕組みができるとよい。

・中学校の教員も、専門学科について十分に理解していない場合が少なくない。進路指導を行う上でも、より多くの情報がなければ適切な助言は難しいのではないか。そのため、中学校に対する情報発信やPRをさらに充実させる必要があ

ると感じる。学校の魅力向上と PR の強化を両輪として進めていくことが必要ではないか。

（３）県立高校の現状について

・中学生が将来の姿を思い描き、自ら進路を選択することは現段階では情報不足により、決して容易ではなく、それを受け止める教員や保護者への負担も大きい。生徒本人にダイレクトに情報を届けるアプローチは非常に有効であると考えている。中学生にとって身近なスマートフォンや SNS（Instagram や動画プラットフォーム等）を活用し、各高校の特色、専門性や部活動、授業の様子など、文字だけでは伝わらないリアルな魅力をダイレクトに発信することが、「その高校に進学すると、将来どのような姿になれるのか」というキャリアパス（将来像）につながると思う。

・実際に農業高校でどのような学びが行われているのかを具体的にイメージできていない教員もいる。進路指導を行う上では、教員自身が高校を見学し、そこでどのような教育や学習活動が行われているのかを理解する必要があると感じている。

・農業高校や工業高校を選ぶ生徒には、実際に学校見学へ参加している生徒が多い。少しでも興味を持って学科を選べば、その後の３年間を前向きに充実して過ごせるという印象がある。

・土木造園科は、名称だけでは何を学ぶ学科なのか一般には分かりにくい。まずは中学校の教員に理解してもらうことが重要だと感じた。そのため、学校の魅力発信や志願者確保に向けて、中学校の教員への PR を積極的に行っていきたいと考えている。

（４）農業科・コース設置校の学びの分類、進路状況について

・商業、工業、農業などの分野を総合学科として一つにまとめるというのも、一つの考え方かもしれない。

・農業を選ぶ生徒は意欲的で落ち着いている生徒が多い。中学校では「大学進学を目指すなら普通科高校、専門的な技術を身に付けて就職を目指すなら専門学科の高校」という進路指導が行われているようだ。一方で、将来何をしたいのか分からない中学生も少なくない。このような学びの魅力をもっと発信し、学びを通じて人間的な成長を促していくことが大切だと考える。

・就職先については、特に園芸や農業分野では選択肢が限られる面もある。そ

のため、農業高校には専門的な知識や技術を持つ人材の育成が求められているが、それだけでなく、多様な進路や希望に対応することも必要だと考える。
・地域産業を支える人材を育成するという観点から、将来像を示す「グランドデザイン（教育の中長期的な全体構想）」が必要ではないかと思う。また、農業高校の教員は努力していると思うが、学校の魅力の発信はまだ十分ではないと感じている。
・現在は、純粋な農業分野よりも、生物工学や食品分野を希望する生徒が非常に多くなっている。
・農業高校卒業後にどのような進路や将来が開けるのかを、中学生に分かりやすく示せるようなグランドデザインが必要だと感じる。
・これからの農業高校の学びの分類としては、生徒たちが将来の姿を具体的にイメージできるよう、大きく２つのキャリアの方向性を分かりやすく示していく必要がある。１つ目は、ICT やデータを活用する「スマート農業の担い手」である。ドローンによる生育管理や、AI を活用したデータ分析など、これからの農業生産管理の最前線を走る人材である。授業のなかでも、デジタル技術に触れる機会を積極的に増やし、最先端の農業ビジネスに対応できる現場型コース。２つ目は、組織をまとめ上げる「マネジメント能力を持ったリーダー」である。海外人材の活用が進むなかで、多様なスタッフとコミュニケーションを取り、生産現場をマネジメントする役割である。マネジメントや労務管理、リーダーシップを学ぶカリキュラムを通じて、組織を牽引する能力を学び、管理者としての経営型コース。これら「先端技術型」と「組織管理型」のそれぞれのキャリアパスについて、本人、そして保護者の皆様にも一目で伝わるよう、イラストや図解を用いた分かりやすい進路マップの作成も有効的だと思われる。
・農業現場では技能実習生が働いている姿をよく見かける。そのような人たちと協力して仕事を進めたり、指導したりできる人材を育てることも、農業高校で学ぶ生徒の役割の一つではないかと思う。
・農業系学科の生徒の進路が、大学進学に十分結び付いていない現状は少し残念に感じる。
・農業土木を学んだ生徒の中には、土木分野の専門職として地元自治体の公務員になる者もいる。学んだ内容が将来の進路にしっかり結び付くことが大切だと感じている。
・東京の農業系大学への進学を希望しても、地域によっては都内への通学が難

しく、進学のハードルが高くなる場合がある。農業分野でさらに学びたい生徒が学びを継続できるよう、農業大学校との連携を図りながら、専門的な学びを次の段階につなげていくことを、今後より意識していく必要があると感じる。

（５）農業科設置高校建物状況・備品状況について

・施設の老朽化が進んでいるにもかかわらず十分な更新が行われていない。教育内容の充実はもちろん重要だが、施設や設備の整備も必要である。また、施設の老朽化が進むと、生徒の安全面への影響も懸念される。更新に多額の費用がかかることは理解しているが、計画的に整備を進めてもらえるとありがたい。

・施設は全体的に非常に古い。また、生徒数は減少しているにもかかわらず、農場は生徒数が多かった時代と同じ規模のままになっている。以前は生徒が管理できていた作業を、現在では人手不足のため教員が補わなければならず、悪循環に陥っているように感じる。そのため、施設や農場についてはスクラップ・アンド・ビルドの考え方を取り入れながら見直していく必要があるのではないか。学校そのものは維持するとしても、農場の規模などは再検討すべきだと感じる。

・他県でもただ古い施設を使い続けるのではなく、スマートフォンで温度を確認できる設備などをモデル的に導入し始めている。一度に全てをスマート化することは難しいが、計画的に少しずつ環境を改善していくことが重要だと感じる。

（６）他県の農業関係高校の取組例について

・県内では君津青葉高校や大原高校、安房拓心高校で総合学科を設置しているが、「園芸科」や「食品科」といった専門学科の方が、外部から見て内容が分かりやすいのではないか。また、「担い手の育成」という観点では、農業が産業として発展していく中で、工業分野のように新入社員を受け入れて育成する仕組みが農業分野にも整えば、状況は変わっていくと思われる。

・農業教育を行うためには、施設改修でも指摘されたように、多くの予算が必要となる。設備の更新や維持、新たな設備の導入を進める上で、学校数が多く広く分散している現状では、全ての学校で同じように整備を進めることは難しいのではないか。そのため、重点的に取り組む分野とそうでない分野に

メリハリをつけなければ、千葉県全体の農業教育の質を向上させることは難しいと思われる。また、農業教育には担い手の育成だけでなく、人間形成や地域産業の振興・支援といった役割もある。

・千葉県には農業高校が数多くある。そのため、将来的に学校を維持していくには、県外を含めて幅広く生徒を集める必要があることは明らかである。この現状を踏まえ、学校の再編やブランド作りについても検討していく必要がある。最新の施設や設備については民間の力を活用するなどして効率化を図り、本当に生徒に必要な分野へ予算を重点的に配分することが重要である。その上で、専門性を高めることで他地域からも生徒を集めることができ、学校のブランド化にもつながるのではないかと思う。

・民間による学校運営も有効な選択肢の一つだと思う。例えば、千葉県の農業分野においては、JA が学校を運営するような形も考えられる。そのような取組によっても、学校のブランド化を進めることができるのではないか。

（７）N-E.X.T.ハイスクール構想について

・６次産業化における「販売（３次産業)」の壁は非常に厚く、これを一つの組織や学校だけで担うには限界がある。本県が持つ農業・商業・水産の各専門高校が、それぞれの強みを持ち寄って連携するモデルは、これからの地域産業を担う人材育成において極めて有効なアプローチである。
具体的には、以下のような連携の形なども考えられる。

農業高校×商業高校による「販売・マーケティング」の強化
農業高校が丹精込めて生産（１次）し、加工（２次）した魅力ある農産物を、マーケティングや流通のノウハウを持つ商業高校の生徒たちがプロデュース・販売（３次）する連携をさらに深める。これにより、より実践的で効果的な６次産業化を学びの場で実現。

農業高校×水産高校による「農水連携」の推進
　本県は全国屈指の水産県でもあり、銚子をはじめとする水産加工技術には大変優れたものがある。この水産業の高度な加工ノウハウを農業分野と融合させ、例えば地元の魚介類と農産物を組み合わせた新しい缶詰やレトルト商品の開発など、学校の枠を超えた「農水連携」の取組等。

「地域クラスター化」の実現に向けて

「クラスター」という考え方の通り、今後は点と点の活動にとどまらず、学校、地域企業、地元の生産者が一つの集団（クラスター）となり、持続可能な産業を生み出すネットワークが重要になる。千葉県全体の企業や学校が有機的につながり、お互いの強みを活かし合える「千葉県型地域クラスターモデル」の構築に向け、関係部局とも緊密に連携しながら、新しい専門教育の可能性を千葉県がモデル的に構築するべきだと思われる。

・高校と農業大学校との連携策として、まずキャリアサポート実習に高校生向けの枠を設け、高校の教育課程の一部として位置付けることで、高校生が早い段階から専門的な学びを経験できる仕組みが考えられる。また、高校生が課題研究に取り組む際に、農業大学校の専攻ごとの研究室などに所属し、大学校生とともに実習や研究活動を行う方法も考えられる。
・高等専門学校（高専）の仕組みを参考に、高校３年間と農業大学校２年間を接続した５年一貫教育を導入する案も考えられる。高校在学中から農業大学校と連携した教育を行い、修了後には希望に応じて大学への編入学につなげることで、より高度な学びへの道を開くことができるのではないか。
・民間企業のノウハウを学校のカリキュラムに取り入れることも有効ではないかと考える。生徒の柔軟な発想と民間企業の知識や経験を組み合わせることで、新しい事業や組織運営の仕組みを生み出す取組につなげていきたい。
・人口減少や市場の国際化が進むなかで、これからの千葉県の農業を発展させていくためには、高校時代から世界に目を向けた「グローバルな視野」を養うことが不可欠である。本県の農業高校を「国際的な学びの場」へと進化させるため、以下の取り組みなどは有効的と思われる。

海外の先進的な知見・技術との接触

海外のスマート農業技術や持続可能な農業経営の事例を学ぶ機会を設けるとともに、デジタル技術を活用した海外の学校や研究機関とのオンライン交流などを通じて、生徒の視野を世界へと広げる。

海外からの人材受け入れ体制の検討

日本の高度な栽培技術や安全・安心な農作物の生産管理は、海外からも高く注目されている。将来的には、日本の農業を学びたいと願う海外の若者を高校段階から受け入れ、県内の生徒と切磋琢磨し合えるような環境づくりにつ

いて、関係機関と連携しながら可能性を探っていく。

（８）今後の農業関係高校のあり方について

・他県の農業高校の取組の中で特に興味深いと感じたのは、川越総合高校の事例である。同校では１年生全員が農業を学んでいる。「生きる力」を育むという観点から、農業科以外の生徒にも農業を学ぶ機会を設け、関心を持ってもらおうとしている。この考え方は農業高校だけの課題ではなく、食育も含めた教育全体の中で、農業を学べるカリキュラムにつながるものだと思う。

・新しい取組や先進的な教育を進めることも重要だが、まずは基本をしっかり固めることも大切である。その上で、生徒たちの活躍を社会に広く知ってもらう取組や、民間企業と連携して学校だけではできない教育を行うことが、学校の魅力向上につながるのではないかと思う。そうした経験を通じて、生徒が面白さや将来につながる学びを見つけられれば、それは大きな財産になると考える。

・農業高校を見学すると生徒が実習に熱心に取り組む姿が見られる。一方で、老朽化した農場施設や使われていない建物も目立つ。普通科や商業科の高校ではあまり見られない光景であり、実習や作業に興味を持って見学に来た中学生にとって、「古くて壊れた施設がある」という印象は大きなマイナス要因になるのではないか。

・普通科高校でも地域の商工会と連携した地域活動やキャリア教育は行われているが、それと同様に農業高校の教育内容をさらに充実させることが重要だと感じる。農業分野で活躍する地元企業や事業者と連携し、地域資源を活用した取組を生徒が体験できる機会を増やし、生徒自身が主体的にアイデアを出して活動できる場を設けることができれば、農業高校の魅力はより中学生に伝わるのではないか。

・農業従事者が減少する中、農業高校を通じて築かれる先輩後輩のつながりや仲間とのネットワークは、今後も大切なものではないかと思う。同じ経験を共有した仲間との強い結び付きや人脈を築ける学校であってほしい。

・現場では自ら考え行動できる人材が求められている。学びの中で課題に取り組み、成功や失敗を経験しながら成長することが重要である。また、その経験を仲間と共有し、学び合える関係を築ける高校であってほしいと思う。

・即戦力となる資格を在学中に取得することや、若いうちに多様な環境を経験することは、生徒自身の成長だけでなく、採用する企業や地域社会にとっても

大きな安心感とメリットにつながる。これからの農業に不可欠な「ドローンの操縦資格」をはじめ、大型農機の運転免許や安全基準に関する資格など、学校に在籍しているときにチャレンジできる体制をさらに整えてほしい。これにより、企業の採用ニーズに応えるとともに、生徒たちの自信とキャリアアップの後押しになり、より鮮明な将来の歩む道を生徒たちも明確にできると思われる。その他、千葉県内にとどまらず、他県の先進的な農業法人や特色ある産地でのインターンシップ、現地研修の機会を設け、異なる地域の技術や経営感覚を肌で学ぶことで、多様な状況に対応できる魅力的な人材が育つと思われる。海外の農業や食文化に触れる体験・交流プログラムの可能性についても検討して頂き、幼少期からグローバルな視点をもち、将来的に「世界のなかでの千葉の農業」を意識していただき、人材の土台を築き、千葉県農業高校の未来が明るくなることを願っている。

・地域には様々な農業経営者や農業関連企業が存在する。そのような地域資源との連携が、特色ある学校作りにつながると感じる。生徒は実際に見学しなければ分からないことも多いため、そのような機会を積極的に設けることが望ましい。
・地域とのつながりは農業教育にとって非常に重要であり、その視点は今後の農業高校のあり方を考える上でも欠かせない要素だと思う。
・千葉県の将来を考えると、地域の学校として総合学科高校へ移行していくことも一つの方向性ではないかと思う。
・現在の総合学科高校は、進路選択に迷っている生徒にとって選びやすい学校形態である。総合学科は専門性が弱くなるという考え方もあるが、それは教育内容や指導体制による面が大きく、現代のニーズには合っていると感じる。また、県南に総合学科高校が集中しているため、県北にも設置を検討してよいのではないかと思う。
・４０人の定員を維持することが難しい状況が続いている。学科再編を繰り返すと学びの内容が分かりにくくなるため、総合学科として学びを残す方がよいのではないか。また、近隣に進学校がある場合には、統合も選択肢の一つとして考えられる。
・コース制の導入や遠隔授業の活用も一つの方法であり、生徒の学びの機会を維持することが重要である。
・薬園台高校のように普通科との統合や、工業系学科との統合も考えられる。また、既存の農場施設を活用しながら普通科を併設することも一つの選択肢で

ある。

・総合学科は生徒にとって比較的受け入れやすい形態ではないかと思う。一方で、学級数や定員が減ると選択できるコースが少なくなり、学校の魅力低下につながるという指摘もある。今後、農業高校の規模縮小が予想される中、各校で実習施設を維持することは難しく、多額の費用も必要となる。そのため、各学校が全ての施設を保有するのではなく、民間農場や公的機関と連携し、実習場所として活用する仕組みを検討してはどうか。

・生徒同士の横のつながりを築ける高校になってほしい。同じ志や考え方を持つ生徒同士が連携できれば、新しい発想や挑戦的な取組も生まれる。また、高校３年間を通して何か一つをやり遂げたという達成感を得られる場であってほしい。部活動でも課題研究でも、自分が情熱を注いだ経験は将来につながる。学校規模が小さくなったとしても、「横のつながり」と「達成感」という二つの要素は大切にしてほしい。

・生徒数の減少に伴い統合や再編は避けられない状況にある。農業高校としての専門性を改めて見直し、専門高校として発展させるのか、総合学科として選択肢を広げるのか、いずれかの方向性を選ぶ必要がある。どちらが最適かは実際に取り組んでみなければ分からない部分もあるが、中途半端な総合学科にするより、専門性を持った学校として再編する方がよいのではないかという考えもある。

・今後２０年、３０年先を見据え、日本の農業教育の強みを継承しながら、世界に誇れる農産物や商品作りを千葉県から発信していくことが理想である。そのためには、他県に先駆けた先進的な教育システムを構築し、国内外から人材が集まる環境を整えることが重要である。千葉県ならではの特色を生かした新しい教育を展開していく必要がある。

・農業高校卒業後の進路や将来像を中学生に分かりやすく示すことが重要である。農業高校でどのようなことが学べるのか、その学びが将来どのような進路につながるのかを、より積極的に発信する必要がある。例えば、高校と大学が連携する取組などを通じて、専門性を生かした達成感を得られる機会を提供できるのではないか。また、自分たちの学びが社会でどのように活用されているのかを実感できることも、生徒にとって大きな魅力になると思う。

・農業高校の魅力は農業教育だけではなく、部活動を含めた活力ある学校作りにもある。そのため、そのような魅力ある学校を目指していく必要がある。また、普通科を含めて学校配置全体を見直し、地域ごとのバランスを考えること

も一つの方法である。

・千葉県の農業高校における先進的な取組が全国へ広がり、日本の農業教育の発展を牽引していくことを期待している。一方で、そのような教育を充実させるためには、学校として一定の規模を確保することも重要である。総合学科は規模が小さい場合、教員数の不足によって多様な系列やコースを設置することが難しくなるため、一定の学校規模が必要である。

（9）県立高校の魅力向上に向けた中学生・保護者アンケートについて

・農業高校から国立大学へ進学するルートは、実は比較的競争率が低いという見方もある。そのため、中学生の段階でこうした進路上のメリットを理解してもらうことが重要である。

・卒業後の進路実績を積極的に発信していくことが重要である。関東圏にも、宇都宮大学や茨城大学など進学先として目指せる国立大学がある。

・学校を維持していくためには、一定数の生徒を確保することが欠かせない。そのため、生徒数の少ない学校をそのまま維持することは難しい。これまでは学校を残すことが重要だと考えていたが、施設整備の課題や予算面の状況について話を聞く中で、今後は選択と集中を進めながら、それぞれの学校の専門性を高めていく方向になるのではないかという印象を受けた。

・学校の魅力向上を考える上では、入学した生徒が活躍できる機会や環境を確保することが不可欠である。また、生徒の活躍は国立大学への推薦入学にもつながっている。学校の魅力は体験入学の印象だけで判断されがちだが、学校ごとの違いは必ずしも大きくない。むしろ、入学後に生徒が活躍できる場や成長できる環境が整っていることこそ、大きな魅力の一つである。

・生徒が高校を選ぶ際には、制服のデザインも判断材料の一つになっている。また、農業高校の特徴の一つは、身近に花や野菜などの農産物があることである。体験入学の参加者が帰りに花や野菜を持ち帰ることができれば、学校の魅力を伝える一つの方法になるのではないか。

・一つの町に高校が一校しかない地域では、その高校がなくなると若者が地域から離れてしまう可能性がある。そのため、地域にとって高校の存在は非常に重要である。特に都市部から離れた地域では、地域唯一の高校が果たす役割は大きい。制服のリニューアルや学校の魅力向上を進める際には、自治体とも連携しながら取り組むことが重要である。